〈事例報告〉

図書館による学習支援の活用：教員のFD推進にも

嶋 﨑　尚 子（文学学術院教授）

いうまでもなく、図書館は大学の知の象徴であり、宝箱である。早稲田大学へ入学した学生たちには、まず本学図書館の類まれな豊かさに触れてもらいたい。そうした願いをかなえるために、戸山図書館を中心とした図書館による文化構想学部・文学部学生への学習支援は非常に有効である。

文化構想学部・文学部では2007年度新学部設置当初から、図書館の全面的協力をえて、１年生の必修基礎演習クラスでの学習支援を実施している。2010年度には、図書館の豊かさを実感し、「使わない手はない」と思わせるための基礎的なAコースから、文献情報検索のスキルの初歩を身につける検索演習のCコースまで３コースを設け、４分の３以上のクラスが受講している。詳細は、「ふみくら」78号で戸山図書館担当課長から報告されているとおりである。

Aコースでの中央図書館ツアーは、ガイド役の図書館職員の方々がいかに図書館を愛しているか、大切にしているかに触れる機会である。これまで３名の方のガイドを受けたが、三人三様の味があって、実に楽しい。そしてその想いは学生たちにも十分に伝わっている。またツアーでは、特別資料室、貴重書庫、AVルーム（豊富なAV資料とAVブースはたいへん魅力的だ）、雑誌バックナンバー書庫、展示室など、図書館の施設として新入生の頭にはなかったようなものも紹介してくれる。

BコースとCコースは、PCを使っての情報検索であるが、こちらは実のところなかなか難しい。１年生の場合には、ITスキルと関心に個人差が大きいこと、また情報検索の必要に迫られていないことなどが主因で、貴重な説明が素通りしてしまうという懸念がある。この種の講習はタイミングが非常に重要であるが、他方では、早い時期にその一端を知っておくことの効果も重視すべきである。この点は担当教員の判断にゆだねられている。

さて、必要に迫られた場合であるが、私のように、ITスキルに長けておらず、また関心自体もそれほどが高くない研究者にとって、急速な進歩をみせる図書館等の情報検索システムは、宝の持ち腐れになりかねない（いやすでになっている）。実は、21世紀に入る前後から、私には、ほかの研究者や教員がインターネットスキルをどのように習得しているのかという疑問と、自分が取り残されているという不安とがつきまとっている。非常に効率的な情報検索サイトやエンジンがあることには気づいているのだが、実際にどう使えばよいのかを積極的に学ぶ機会は逸してきた。大げさではなく、これはかなり深刻な問題となっていた。

もはや、おそるおそる試みる程度ではとても使いこなすまでには達しないことは、明白であった。そこで、2007年から指導クラスの３年生、４年生、大学院生を巻き込んで、専門である社会学に関する情報検索の講習企画を戸山図書館にお願いし、毎年１回これまでに４回実施していただいた。

お蔭様で３年生と４年生には、情報収集スキルが身につき始めている。卒業論文でも参考引用文献は、単行本に集中するのではなく、ようやくCiNiiなどを利用して学術論文を中心とするものへと変わりつつある。また、検索結果をRefWorksを用いて管理する習慣も身につきつつある。かつ剽窃等に関するマナー、倫理の理解へとつながっていると確信している。残るは文献を読みこなすスキルを専門演習で学ぶことであり、これは私の課題である。

そして肝心の私であるが、ご想像のとおり、毎年、学生のヨコでこっそりと誰よりも真剣に受講している。情報検索サイトが毎年豊富になっていくなかで、なんとか最低限のスキルの維持を果たしているのである。一番の効果は私自身だろう。「学生のため」を大義名分にしつつ、FDの一環として、私のような（？）教員の方々にはぜひともお奨めしたい。